

中国戦国時代には青銅凹面鏡とモグサで日光から採火し、雲夢秦簡『封診式』（前 262～前 217）に記載の検屍規定「久（灸）故癍」からすると癍痕となる打膿灸が行われていた。灸瘡からの排膿に石鍼を用い、その出血から瀉血法も生まれた。癍痕から灸刺部位も次第に認知されたが、まだ穴名も経脈概念もない。初期の石鍼法を記録した『史記』扁鵲伝の「外三陽五会」とは、外（頭上）三陽（5列）の五会（兪）計 25 部位をいい、この灸刺列と部位別取穴を 1 世紀初の『素問』は「五行・行五」と定型化している。敦煌本『明堂』と甲乙経『明堂』の孔穴配列によると、頭部から下行する中心線および並行する背部と胸腹部の「灸刺列」が最初に認知されただろう。これは体幹骨格が上下に連続する構造に基づいており、経脈概念の第 1 段階だった。

やや遅れて認知されたのが四肢を上行する灸刺列で、背景には手足の怒張した血管と脈診がある。三陰三陽説を併用し、手足から顔面や一部臓腑にいたる第 2 段階の「11 経脈」を記録したのが、前 3 世紀末以前の『足臂十一脈灸経』だった。手足経脈の取穴法を、2 世紀前後の『九卷（今の靈枢）』は「五五・二十五、六六・三十六」と定型化していた。頭部・体幹の灸刺列を手足の経脈と連続させたのが前 2 世紀の綿陽人形、灸刺点もえがいたのが前 2～前 1 世紀の成都人形である。成都人形の背部には臓腑名が記入され、背部の灸刺点と臓腑の相関性が最初に認識されたことを示唆していた。同時に灸刺点への命名が徐々に始まり、部位と主治など初期の孔穴概念が形成されたのは約前 1 世紀で、その様相が『素問』にみえる。

紀元前後～1 世紀には石鍼にかわり孔穴への金属微鍼法が普及した。1 世紀後半の経脈篇（『九卷』所収）は『足臂』系の灸法を鍼法に発展させ、脈気が臓腑と全身を大循環する第 3 段階の「12 経脈」を提起。頭部・体幹の孔穴列を形式上は手足経脈に帰属させたが、各穴の属性などは簡単に改変できない。そこで 3 世紀中期の原『明堂』は、頭部・体幹を下行する孔穴列と手足を上行する臓腑 12 脈の孔穴列を折衷し、命名された孔穴を術数論から 349 穴に整理した。

原『明堂』の折衷説は、4 世紀後半の甲乙『明堂』から 7 世紀中期の千金『明堂』まで踏襲された。7 世紀後半の上善『明堂』は手足 12 脈の孔穴配列を『九卷』経脈篇の循環説で再編し、頭部・体幹の孔穴も臓腑 12 脈と任脈・督脈に分配した。これで全孔穴を「14 経脈」に所属する「経穴」としたことは、経脈説の出現と孔穴への命名につぐ進展、かつ現経絡・経穴説の予見ともいえる。

以上のように、頭部・体幹の「灸刺列」が次第に手足の「灸刺列－臓腑経脈」に連続され、上善『明堂』で現在の経穴・経絡説を予言していた。